

たり曲げたりの手作業ですから大変な作業量だったと思われます。

大正12年になり、第1回全日本スキー選手権大会が小樽で開かれており、この時に飯山中学の生徒さんが参加しております。

小樽に参りまして、イタヤカエデを使ったスキーを見まして、これはいいということで飯山に帰り、イタヤ材を使ったスキーづくりをアドバイスされたとのことです。

イタヤ材を紹介され、良い材料を見つけなければということで、その頃の北海道や樺太にまで足を伸ばして、スキーの適材を探したと記録があります。

先代の小賀坂廣治でございますが、このような爺さんの元でしっかり修行してきたものですから、昭和7年には父親の濱太郎の指導を受けまして、先代廣治は当時にしてはめずらしい5枚張り（ヒッコリー・檜・桜・檜・ヒッコリー）の本格的な合板レース用（クロスカントリー）のスキーを作っております。



勿論、先代の廣治は自分で滑ってテストをして、選手としても活躍していました。

昭和13年には、第9回明治神宮体育大会男子リレーに出場した廣治は3位に入賞しております。

この時のメンバーには、全日本スキー連盟副会長を務めた片桐匡さんもメンバーの一人でございます。この時の健闘を称えられまして、先ほどの



新聞を書かれておりました堀内文次郎さんから「奮闘努力」という賞をいただいており、我が社に飾っております。

第二次世界大戦になりますとスキー製作どころではございません。木材の加工が得意だということで、軍事産業として飛行機のプロペラを作っておりました。

戦後、先代の廣治はスキー製作に必要な加工機械や物資がない中、大変な苦勞の末、ようやく第二の創業ともいえるべき、スキーづくりを再開しているわけでございます。その時に、合板専門の看板をあげて、他社メーカーさんからは「合板専門と言って大丈夫かい」と言われたと話をしておりました。

よく申しておりましたのは、「戦争が無ければ日本のスキーもとっくに合板に変わっておったよ」と、戦争で中断したために合板が進まなくて、単板スキーのまま戦後を迎えました。ようやく、戦後から合板が作られ始めたものですから、「合板専門」というのは皆さんからみれば冒険に見えたのではないかと思います。



にわたってつないできた物づく
師（株）小賀坂スキー製作所
代表取締役社長 小賀坂 浩

昭和33年には、株式会社小賀坂スキー製作所を飯山にて設立しております。